城址に建設された仮設模擬天守閣の建設経緯と意義

－戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究 その3－

CIRCUMSTANCE AND SIGNIFICANCE OF THE TEMPORARY RECONSTRUCTION
OF CASTLE TOWERS ON THE RUINS OF CASTLES

－ Study on the reconstruction of castle towers in regional cities in the prewar period Part 3－

野中勝利*

Katsutoshi NONAKA

My research aims to elucidate the circumstances and significance of the reconstruction of castle towers in the period preceding the Second World War. This paper covers reconstructed castle towers built as temporary structures on the sites of early-modern castles in Kofu and Tsuyama. Both were built as privately funded projects for exhibitions at the castle sites to commemorate the opening of railway lines. Both exhibitions drew many visitors and the towers were illuminated at night. Intended as temporary structures, the reconstructed towers were popular and spurred requests from local citizens that they would remain in use after the exhibitions ended.

Keywords : Castle Tower, Castle-Town, Ruin of castle, Modernization, Temporary Building

天守閣, 城下町都市, 城址, 近代化, 仮設建築

1. はじめに

本研究は、昭和戦前期までに城址に建設された模擬天守閣を対象として、その建設経緯やその意義を明らかにすることを目的としている。対象となるのは表1に示すように全国で8事例ある。これまでに戦国期城郭の城址に建設された3事例と近世城郭の城址に建設された大阪を除く2事例について、その建設経緯と意義を明らかに

した¹⁾²⁾。

本稿では残る甲府と津山の2事例を取り上げる。それぞれ城址を会場として開催された共進会と博覧会において建設された仮設の模擬天守閣である。これらの仮設模擬天守閣の建設前後の経過と意義について明らかにする。本研究では城址で建設された天守閣の意義を、①位置、規模や外観などの考証や復元の志向性、②施設内容とその意図、③地域社会での受容性、の視点から捉える。天守閣の復元において、適切な「復元」には、①高度な近代の実証性、②歴史感が共有された行為、の二つの要素が必要とされている³⁾。なお「模擬天守閣」「復興天守閣」など、分類する視点によって用語とその整理のしかたは異なるが、本研究ではそうした分類を主眼とせず、一括して「模擬天守閣」としている。

甲府の共進会は1906年に山梨県が主催し、津山の博覧会は1936年に津山市が主催して開催された。そこで山梨県議会議事務局と津山市議会議事務局において、開催前後の山梨県会と津山市会の議会議事録や決議録、協議会議事録等を確認し、基礎資料とした。また山梨県立博物館と津山郷土博物館で保存されている城址や博覧会関係の書類のほか、関係図書館などで当時の記録や地元紙などの史資料の確認と収集に努めて資料とした。特に模擬天守閣に対する地域社会の受容性に関しては、住民の意向を代弁する役割を担う議会での議

表1 戦前に建設された模擬天守閣

	城址	建設年	建設後の状況	備考
戦国期城郭	岐阜	1910年	1943年焼失	木造 昭和31年再建
	洲本	1929年	現存	鉄筋コンクリート造 建設時は洲本町、現洲本市
	羽衣石	1931年	1990年建て替え	鉄骨造、トタン葺き 建設時は花見村、建て替え時は東郷町、現湯梨浜町
近世城郭	大阪	1931年	現存	鉄筋コンクリート造 国登録有形文化財
	(郡上)八幡	1933年	現存	木造、市指定文化財 建設時は八幡町、現郡上市
	(伊賀)上野	1935年	現存	木造、市指定文化財 建設時は上野町、現伊賀市
	甲府	1906年	共進会后取り壊し	木造、山梨県主催共進会の仮設建築
	津山	1936年	1945年取り壊し	木造、津山市主催博覧会の仮設建築

注) 太線枠内が本稿の対象

* 筑波大学芸術系 教授・博士(工学)

Prof., Faculty of Art and Design, University of Tsukuba, Dr. Eng.

論や、地域住民への紹介や地域住民の行動や意見を地元紙から抽出する方法を採っている。

2. 甲府城址に建設された仮設の模擬天守閣

(1) 建設時までの城址の状況

藩政期の甲斐国は幕府直轄地となり甲府城は甲府勤番の支配下におかれた。天守台があり、天守の立地可能性は指摘されているが、その存在を立証する根拠がないことから、天守は建てられなかったとみられる。

1868年3月に幕府は甲府城を朝廷に返還した。1871年8月に兵部省の所管、1872年2月に陸軍省の所管となった。

1873年1月には内城が「存城」となり、継続して陸軍省の管理になった。その後城の取り壊しが進み、1877年前後には城内の主要な建物は破却された。

その後、政府は「存城」となった城址のうち現に軍用地として利用していた城址を除いて払い下げることにした。1890年2月15日に不用城郭の払い下げが陸軍省の請議によって閣議決定された⁴⁾。甲府城址もその対象だった。山梨県はそれ以前から政府に対して甲府城址の払い下げを申し出ていたが、交渉は進まなかった。

一方、山梨県の政財界の働きかけもあり、中央線の鉄道敷設が決まり、1896年に着工された。甲府駅は城址北部に立地することになり、1897年に城址の清水曲輪などが削られて、鉄道敷と甲府駅の整備が進められた。

これを契機として、1897年12月の山梨県会において、城址の払い下げに関する建議が提出された⁵⁾。そこでは「舞鶴城ハ本県ノ一偉観」であり、「歴史上ノ遺物トシテ永ク保存」することが緊要であるとしている。そして「公共的事業ノ用地」として長く保存すること目的としていた。それに対し県当局からは、これまでも払い下げを希望し、知事が上京する際には内務省や陸軍省にその旨伝えているが難しい状況であり、せつかくの建議でも尽力の余地がないと、

図1 甲府城址周辺(1903年)

図2 共進会予想図(1904年)

消極的な答弁があった。その後の議論の結果、全会一致で建議書を提出することが決まった。いずれにしても県、県会ともに城址の払い下げを切望していたことがわかる。

(2) 城址で開催された一府九県連合共進会

1) 当初の共進会計画と城址の公園化

鉄道敷設工事が進み、ようやく1903年6月、中央線が甲府まで開通し、東京と結ばれ、甲府駅が開業した(図1)。

それを前提として、当時の県知事は、同年11月臨時県会で、翌年秋に甲府駅に近接する城址で府県連合共進会を開催するための勸業費を含む追加予算案を提出した⁶⁾。

予算案は、総額約十万円のうち1903年度分は約一万円、その使途は主に道路、橋梁、排水路などの整備である。1904年度分には建設費と共進会の開催費用があり、その中には敷地の買入れ費用として約1万4千円も含まれていた。議会では共進会の開催に対し賛否両論あり、甲府市から二万円の寄付を受けることも条件として最終的には採決により予算案は可決した。

翌1904年元旦の地元紙ではさっそく、「舊舞鶴城内聯合共進會開設之図」(図2)として鳥瞰の予想図が掲載された⁷⁾。ただしそこには天守台に模擬天守閣の姿はなかった。

県会に共進会予算を提出するまでの、県と政府との交渉経過は以下の通りであった。1903年8月23日付で、山梨県知事から内務省、陸軍省、司法省の三大臣に対し、甲府城址の譲与願書、十月に上申書を差し出し、許可を得た。その過程では譲与の特段の理由がないことから、差し当たって無償貸与による利用とし、翌年開催予定の府県連合共進会の敷地とする。共進会の本館を県の物産陳列館に転用するなどして、特売で払い下げるまで県の公園として使用することが特別に許可された。ただし実質的な公園設置に関して内務省に願い出ると、二年半の貸与期間であるから公園設置は認められないとされた。それに対し、有期限の借り受けであるが、共進会の開催とともに払い下げられることからなどと事情説明し、舞鶴城公園の開園の許可を得ていた⁸⁾。

県はさっそく1903年11月27日から城址を開放し、「公衆の観覧を自由」にした⁹⁾。1903年12月の通常県会では、1904年4月1日から舞鶴城址を県公園として管理する「公園設置ノ議」が提出され可決された¹⁰⁾。なお正式に主務大臣から県の公園として許可されたのは1904年9月13日である¹¹⁾。地元紙には「舞鶴公園」と命名されたとあるが、県の予算書などでは「舞鶴城公園」とある。

共進会の開催を想定すると、濠を渡って城址に入るには県立中学校の通用門につながる橋だけでは不足であり、新たな架橋が必要であった。そのため幅五間で鉄製の欄干の橋が架けられ、年度末の1904年3月30日に竣工した。遊亀橋と名づけられた。上方には天守台を仰ぎ見ることができる位置だった。

天守台には手すりが設けられた。煉瓦積みの上に石を置き、それに鉄製の柵を取り付け、四隅の鉄柱の頭にはメッキを施し、「頗る見事」な手すりだったという¹²⁾。

公園になる前の城址は、「狐狸の住家¹³⁾」「監獄署の囚人のみ出入せる¹⁴⁾」という状況だったが、こうして公園として利用者を受け入れる整備が少しずつ進められた。

しかし1904年2月、日露開戦に伴い財政緊縮のため連合共進会の

開催は延期となった。ただし翌年度の予算も一部確保し、城址内の地ならしを進めるなど、公園としての体裁を整えることにした¹⁵⁾。

2) 共進会の再計画と府県制による実施

1905年9月、日露戦争の終結により、甲府市内では共進会開催の機運が高まってきた。10月には柳町の有志団体の公親会が県に対し、一時中止となった共進会について、翌年の開催を目指すべきと促す方針を示した¹⁶⁾。11月には柳町公親会は運動体制や方針を協議し、県知事に直接、開催希望を伝えるとともに、他町の団体へも呼びかけ、運動を広げていた¹⁷⁾。

9月に着任したばかりの新知事は、こうした甲府市民の意向を背景として、11月に開催された通常県会に提出した翌1906年度予算に関する冒頭演説で共進会の開催を表明した。ただし物産陳列館への転用を想定した常設施設をやめて仮設建築物にするなど、以前よりも2万円以上も予算額を縮小した計画であった。

県会では、それでも経費節減が必要なことや、収入の見込みがないことなどを背景として、共進会の開催に反対する議員が多かった。12月の県会で、県費が多端であるため、共進会は適当な時期まで延期しすること、ただし城址はこの際購入すること、という建議が21名の連署で提出された¹⁸⁾。それに対し県当局者は、先の政府との交渉経過を説明し、共進会を無期延期にして敷地だけ購入するのは筋が通らないし、それを国は認めない等と反論した。共進会開催を推進する議員の発言もあったが、採決の結果は、起立多数で延期の建議案が成立する事態となった。

共進会延期の建議が成立したことから、県会での予算審議で、共進会の経費を盛った勸業費の全額削除の発議があった。それについて審議の応酬があり、会期最終日でも決着がつかず、本案は審議未了となった。それに対し、県知事は府県制により内務大臣の指揮を仰ぎ、原案執行ということで共進会の実施を決めた¹⁹⁾。

県当局は、県会による延期の建議を覆してまで、国と約束した手続きの履行を優先した。県当局は準備を押し進め、5月末に建物の工事が着手された²⁰⁾。

そして一府九県連合共進会は1906年10月1日の開会式から11月10日までの41日間、甲府城址である舞鶴城公園で開催された。

このように県主導でなかば強引に共進会の準備が進められたが、開催当初でも準備不足が露呈していた。後述のように模擬天守閣の建設も開会式当日に間に合わなかった。

(3) 仮設模擬天守閣の建設

1) 個人の寄附による建設

このような経緯で開催された共進会で、会場となった城址の天守台に仮設の模擬天守閣が建てられた。

この模擬天守閣は佐竹作太郎の寄付によって建てられた。佐竹は京都生まれであったが、藤村紫朗の知遇を得て、藤村が山梨県権令として赴任した時に随伴して県庁入りした。その後、銀行設立に尽力し、経営者になるとともに、東京馬車鉄道や東京電燈の経営にも関わった。また県会議員や甲府市会議員を務めたほか、共進会開催時には衆議院議員でもあった²¹⁾。

佐竹は、共進会の少し前、1906年5月に相川村（現、甲府市）の武田古城址や武田信玄が眠る岩窪墓所の修繕費に百円を寄付してい

る²²⁾。また1903年の中央線開通祝賀会で式辞を読んでいるほか、他の実業家とともに、祝賀会に出席するため東京から甲府を訪れた鉄道局長などの賓客を招待して晩餐を饗している²³⁾。共進会の開催に際しては、甲府市からの寄付金2万円のうち2千円も拠出している。

ただそうした佐竹がどういう背景でこの模擬天守閣を建築しようとしたのか、その言質はみあたらない。

鳥羽正雄は、この甲府の模擬天守閣は隣県の松本城天守の修築工事に刺激されて建設されたと指摘している²⁴⁾。しかしそこでは具体的な根拠は示されていない。佐竹と松本城天守とを結びつける記録も見当たらない。また山梨県の地元紙からは松本城天守の修築にかかわる記事を見つけることはできなかった。

一方で、博覧会の開催にかかる施設としての模擬天守閣という観点からみれば、内国勸業博覧会との関係が想定される。

甲府の共進会開催は、1903年に大阪で開催された国内最大規模の第五回内国勸業博覧会から3年後である。実業家である佐竹はこの内国勸業博覧会を訪れていたと思われる。仮にそうでなくても、当時この内国勸業博覧会については、準備の段階から開催終了まで、山梨県の地元紙でも頻繁に報じられており、佐竹は記事を読んでいたと容易に推察できる。その記事の中では、「名古屋城の模造にて外観美麗²⁵⁾」などと、この博覧会での施設の中でも特徴的であった愛知県売店の売店が何度も紹介されている。

また第五回内国勸業博覧会が甲府での共進会に影響を与えたとみられるものにイルミネーションがある。この内国勸業博覧会では、初めて夜間開場を実施し、会場正門や美術館などを、わが国で初めてイルミネーションで装飾した²⁶⁾。地元紙でも「イルミネーションの壮観」を「夜会之美」として二日間にわたって紹介している²⁷⁾。甲府の共進会では会場正門と模擬天守閣にイルミネーション（電飾）を施している（写真3）。模擬天守閣の発想も、こうした内国勸業博覧会からの影響の一つとしてみることができる。

2) 模擬天守閣の呼称と内容

この模擬天守閣は、高さ50尺、幅56尺の二層であった。甲府では天守が存在した記録はなく、外観意匠を依拠する手だてではなかった。天守台に建てる仮設の小規模な建造物であった。

地元紙では「天主閣」と呼ばれたほか、建設途中では開会までに「天主閣模型の家屋」²⁸⁾、「模造櫓」²⁹⁾、「模型建設物」³⁰⁾と報じら

図3 共進会場図(1906年)(一部加筆)

れ、会期中も「模造天主閣」³¹⁾と呼ばれるなど、呼称が定まっていない。なお共進会事務局が発行した「山梨縣主催一府九縣聯合共進會會場圖」(縮尺 1:1,200)³²⁾には、会場内の施設配置が記され、それをみると模擬天守閣は「天守櫓」とある(図3)。

模擬天守閣は、開会日の夜からイルミネーションで装われた。2千燭の電燈が点灯され、非常な壯観であった³³⁾。しかし模擬天守閣の工事は開会日までに間に合わず、10月6日から一般の観覧者を受け入れた³⁴⁾。模擬天守閣は協賛会により一人2銭の登覧料を徴収した。共進会の入場料金と同額だった。翌7日は、共進会の縦覧が8,936人に対し、「模造櫓」の登覧人は昼間1,419人、夜間274人、計1693人であった。翌8日は、共進会6,324人、模造櫓798人だった³⁵⁾。

模擬天守閣の建設費は約3千円³⁶⁾とも4千円³⁷⁾ともいわれ、イルミネーションの総工費は約2千円³⁸⁾と報じられている。

模擬天守閣内部の詳細は不明である。「山梨日日新聞」は、共進会場の施設や陳列品の内容について、「共進会観覧案内」として七回にわたって連載したが、模擬天守閣についての紹介はなかった。

一方、この連合共進会は県外でも報じられている。鉄道で甲府と結ばれた東京と長野県ではどのように報じられたか。東京の新聞でも記者が実際に訪れ、山梨県内、甲府市内の様子とともに共進会場での見聞を連載し、模擬天守閣についても触れている。

「東京朝日新聞」では四回の連載記事の最後に「模擬天守閣」について触れられている。ただしこの記者は、「城址の最高所に新設せられたる天主閣」に登ろうとしたが、小雨がしきりに降るのでそれを止めて旅館に帰ってしまった³⁹⁾。建物の中に入れば雨宿りができるにもかかわらず、中に入っていない。上層部からの眺望も雨で期待できなかったと思われる。少なくとも入場料を支払ってまで内部に入るという動機づけが低かったとみられる。

「都新聞」では三回の連載だった。陳列館の展示品などの紹介のほか、模擬天守閣を取り上げている⁴⁰⁾。そこでは「天守閣は舊舞鶴城の天主閣に擬して急造せし望楼」であり、「構造粗笨なれど之を凝視すれば堂々として當年の舞鶴城天主閣を追懐せしむるに足る」と評している。かつてあった天守閣を模した建造物として受け止められ、誤解が生じていることがわかる。また内部の様子は説明がされず、「望楼」としている。そこからの眺めについては、「登つて四方を下瞰すれば甲府市の白亜石室一眸の内にあり」、富士山をはじめ八

ヶ岳などなどの「名山群峯四方に聳ち壯觀涯りなき」と表している。甲府市街を一望し、周辺の山並みの眺望の良さを指摘している。また「特に夜はイルミネーションを為して炫耀數里の外を」照らすと、光り輝いている様子を紹介している。

このほか、東京の「東京二六新聞」「中央新聞」、長野県の「信濃毎日新聞」でも共進会の紹介記事の中で模擬天守閣を取り上げている。いずれも建物内部の状況については説明がなく、イルミネーションを強調していた。

3) 建設後の経過

当初は数千人だった入場者も会期終盤にはその数も増加し、11月10日に閉会式が執り行われた。会期中の累計入場者は27万6千288人となった。このうち「天守閣」の登覧者は2万3千684人であった⁴¹⁾。共進会入場者の10人に一人が「天守閣」に入った計算になる。

入場者数は主催者の発表によるものである。会期中では「模造櫓」と報じられたりもしたが、最終的な発表では「天守閣登覧人」という名称になった。地元二紙が同じ標記で報じている⁴²⁾。最後になってこの模擬天守閣は、「天守閣」という名称に落ち着いたようである。

共進会場の陳列館などの建物は仮設であり、会期末になるにしたがい、払い下げの希望が多く寄せられた⁴³⁾。閉会後も建物の借用願いが出されたり、小学校の建築材料への転用などを理由に、県内各地から払い下げ願いが出されたりしている⁴⁴⁾。しかし移築や転用に関する記録は見当たらず、模擬天守閣は他の建物とともに取り壊されたとみられるが、詳細は不明である。

(4) 建設の意義

共進会は、県による城址の払い下げを伴う政府との交渉過程で、その開催が計画された。県会での延期決議を覆してまで県は開催を推進した。すぐには払い下げられなかったが、城址を公園にすることを保証する意味でも共進会の開催は必要であった。

この模擬天守閣については、「天守台址には模造の二層の天守閣が建てられ、松樹の間に隠れるその白壁、さては屋上のサチホコなど、往時の甲府城も斯くやと思われた。」という記述もある⁴⁵⁾。考証による復元でもなく、簡易で小規模な建物であったが、模擬天守閣は見る者に近世の姿を想起させている。

城址の濠に架かる遊亀橋を渡ると共進会場の入り口に門があった。この門は「ゴジツク形の洋風正門」⁴⁶⁾とあるように洋風の建造物であった。遊亀橋の手前に入場券売店があり、そこから道路を隔てて参加各県の売店が連なっていた。人の流れは、これら売店を横目に入場券売店に寄り、遊亀橋を渡って正門をくぐることになる。その動線の上空に模擬天守閣を仰ぎ見ることになる(写真1)。入場者は自ずと正門とセットで天守台に建てられた模擬天守閣が目に入る。共進会の絵葉書も、正門とその上背後にある模擬天守閣を含む構図となっている(写真2)。城址内でも天守台が一番の高所であり、入場者は模擬天守閣を仰ぎ見ながら会場を回遊した。共進会場の視覚的求心性があった。またイルミネーションが正門と模擬天守閣に施された(写真3)。電飾の夜景という非日常性と祝祭性を担った。

この「天守閣」の登覧料は共進会の入場料と同額であり、低層の仮設「天守閣」の内部に見るべき展示品がないとすれば、登覧する動機づけは低かったとみられる。ただし施設内には入らなくても、

写真1 共進会入口前の各県売店

写真2 共進会絵葉書

写真3 共進会夜間電飾

天守台まであがることを誘導することはできる。二層の施設であり、二階からの眺めと天守台からの眺めでは大きな違いはない。天守台からの眺めを体験する誘導装置であった。

模擬天守閣は唯一、城址という近世から受け継ぐ歴史的環境の文脈を受け持つ外観の施設として、その存在を仰ぎ見ることの方に価値があった。天守台からの眺めの良さが記されていることは、逆に市街からもこの模擬天守閣を見ることができる。共進会開催の象徴的施設であると同時に、城址の存在を主張する装置でもあった。

なおこの共進会後も城址で博覧会や大規模集会などが開催された。このうち甲府勲業博覧会（1926年）では同様に模擬天守閣が建設されたようであるが、確認できる資料が乏しく、詳細は不明である。

3. 津山城址に建設された仮設の模擬天守閣

（1）建設時までの城址の状況

津山城は、美作一国を領して入封した森忠政が1604年に築城に着手し、1616年にほぼ完成した。森家4代、松平家9代の居城として領国支配を支えた。城内本丸には五層の天守が建てられ、台の石垣を含めて高さが約96尺あった⁴⁷⁾。

津山城は廃城になると、1874年から翌年にかけて、石垣を残して五層の天守を含むすべての建物が解体され、払い下げられた。城址の多くは畑地となり、周囲の堀も埋め立てが進んだ。1879年の地元紙には、「舊城廓は變じて桑田に化し茶園と為る唯石垣と番松とのみ僅に故景を存す」と記されている⁴⁸⁾。

1890年9月、城址の石垣が崩落したことを契機に、地元有志による城址保存の運動が起きた。1891年2月に鶴山城保存会が発足した⁴⁹⁾。保存会の発起人であり、津山町会議員でもあった矢吹正則が1891年町会で議題に取り上げ、城址の払い下げ請願運動に発展させた。津山町会は岡山県に対して払い下げと公園設置の請願をした⁵⁰⁾。しかし当時は県の許可はなかった。

8年後の1899年に再び町会で城址の問題が議題になり、払い下げの申請方針について議論された⁵¹⁾。1899年、城址の県有地が無償で町に譲渡された。その後、残る一部の私有地を含め、必要な用地をすべて町が買い取ることにした。そして1900年3月、津山町により津山城址は「鶴山公園」として開放された。

町設公園になってから、「石堞を修理し又櫻楓松杉等を植樹」した⁵²⁾。特に1915年と1928年の二度の御大典記念植樹があり、植樹が一気に進んだ。鶴山公園は高さ153尺あり、「津山川の長流に沿ふ全市を脚下に臨み」、遠く山並みを望む「其の景観頗る良く四季杖を引くもの絶えず」と市民の憩いの場となった⁵³⁾。

（2）城址で開催された産業振興大博覧会

津山市は、姫路と津山を結ぶ鉄道の開通を翌年にひかえた1935年1月15日の市会で、18万円の予算で博覧会を開催する具体案が提出された。しかし予算が過大であり、一層の調査研究が必要であるとして、職員や議員が各地に出張して調査することになった⁵⁴⁾。

一方、1935年1月25日、地元の産業団体は勲業博覧会の開催を市長と市会議員に陳情した⁵⁵⁾。組合員135名の連署があった。地元産業界は博覧会の開催を切望していた。

その後、市当局は先に博覧会が開催された呉市や萩市に視察するなどして、あらためて博覧会の計画を練り直した。5月からは毎回

のように市会協議会に諮った。議員の意向は賛否が分かれた。特に予算に対する慎重論が多く、継続審議が続いた。その過程では、大規模な開催として「津山ノ天主閣」でもつくってから開催できないかと、積極的な推進を主張する議員もいた⁵⁶⁾。

総予算の縮小や詳細かつ確実に見込める収入計画により予算を組み直したが、ようやく7月11日の市会協議会で予算案は保留のまま、「大体賛成」ということで開催することのみを決めた⁵⁷⁾。8月14日の市会で、市からあらためて博覧会開催の要項や予算が提案された。要項については即日で議決され、正式に開催が決まった⁵⁸⁾。

ただ開催場所については未定であった。当初、市当局は衆楽公園の南方の土地3万坪について所有者と賃借を交渉したが予算の関係から断念した。次いで鶴山公園と津山男子尋常高等小学校を含めた周辺の土地を選定した（図4）。民間所有地については所有者と交渉し、600坪の桑畑を賃借することで合意した⁵⁹⁾。鶴山公園周辺を含め約4万坪を設定した。なお鶴山公園の立木は取り払わないこととされ、市会協議会でもその点を確認している。

敷地の検討では、前稿で取り上げた伊賀上野の模擬天守閣の建設を記念して1935年に同地で開催された全国博覧会の事務長であった伊藤景介を招聘して専門的な意見を聞いている。伊藤は鶴山公園を実地に視察し、「多くの博覧会場とは興趣を異にし、總ての条件を具備した恰好の敷地だと賞讃」したという⁶⁰⁾。伊藤は、伊賀上野で城址を会場とした博覧会を開催しており、城址開催の有効性を認識していたとみられる。

1935年11月7日の博覧会準備委員会でこの伊藤を正式に相談役として招聘することを決めた⁶¹⁾。伊藤は萩市蹟産業博覧会の事務長を経験したのち、1935年の上野町の伊賀文化産業城落成記念全国博覧会の事務長に招かれ⁶²⁾、事務方の責任者として博覧会を成功に導いた。なお伊藤は特に権限を有しているわけではなく、専門的見地からの相談者としての位置づけだった⁶³⁾。しかし市担当者とともに各地に出品の勧誘に向くなど、それまでの経験を踏まえて実務を担っていた。

また伊藤は、津山駅を管内とする広島鉄道局が、桜の名所である津山市を姫津線全通と博覧会の開催を機会に一段と紹介するために製作したポスターの図案をつくっている。その図案は「會場に五層の天守閣これに櫻を配した美麗な三色刷」であったという⁶⁴⁾。地元紙に掲載されたポスターをみると、白黒でかなり不鮮明ではあるが、確かに模擬天守閣のシルエットや桜花が配されている様子は確認できる⁶⁵⁾。伊藤は津山での博覧会を対外的にアピールする中心に模擬天守閣を据えた。これは伊賀上野での博覧会の成功体験からの延長

図4 津山城址周辺(1928年)

でみることができる。なお伊賀上野での博覧会のポスターでも、背景に模擬天守閣のシルエットが描かれている。

市の博覧会予算は、1936年2月の市会で議決された。その間も開催にむけた準備進められた。1935年12月10日に地鎮祭が執行された⁶⁶⁾。本館の上棟式は翌年1月12日に举行された⁶⁷⁾。

こうして津山市が主催する姫津線全通記念産業振興大博覧会が、鶴山公園を主会場として1936年3月26日から5月5日までの41日間開催された(図5)。姫津線の全通は、博覧会開催期間中の4月8日であり、姫津線沿線からの来場が期待された。

一日の最高入場者数では2万人近くが訪れ、身動きもできないような雑踏であったが、2千人に満たない日も多かった。最終的な集計では、会期中の入場者総数は20万人弱にのぼった⁶⁸⁾。この期間中に、博覧会の入場者に加え、観桜客を含む鶴山公園の入園者は37万人余にのぼった。昨年の同時期に比べ20万人余多かった。また県外からは4万人も来て、昨年の50倍にものぼったという⁶⁹⁾。

1936年11月2日の市会に提出された博覧会の歳入歳出精算書によると1万3千円強の剰余金があった。この剰余金の処分方法は、市費に8千5百円を繰り入れるほか、博覧会誌の編纂や関係者への賞典や記念品代とした⁷⁰⁾。当初の計画よりも好成績で盛況だった。

(3) 仮設模擬天守閣の建設

1) 模擬天守閣の計画と建設

津山商工会議所が中心となって設立した協賛会が、博覧会の施設として模擬天守閣の建設を計画した。1935年10月8日に、商工会議所楼上で博覧会協賛会の創立総会が開かれ、規約や役員などを決めていた⁷¹⁾。協賛会長は商工会議所会頭が兼ねた。

博覧会終了後の報告書では、模擬天守閣を建設することになった背景や経緯は次のように説明されている。当時、復古熱の高まりとともに各地の城址で天守閣再建が計画され、実現されてきた。津山でも天守閣を再建しておおいに国民精神作興に資すると共に、津山市の名所にする案が有志により計画されていた。そうした時期に、「たまたま」博覧会が計画され、協賛会が設立されたことから、その事業として天守閣を郷土館として「臨時建設」することになったということである⁷²⁾。

前稿までに取り上げた模擬天守閣の建設の情報が各地に浸透していたことがわかる。

市側と商工会議所・協賛会側の双方が博覧会の運営の連携をはか

図5 博覧会場鳥瞰図

るため準備委員会が設けられていた。施設配置計画においても主催する市と協賛会が相互の施設計画を持ち寄り、全体としての配置計画を定めている。1935年11月7日の準備委員会で会場内の施設の規模や配置が決まった。その中に天守跡に高層の天守閣を新築して郷土歴史館とする計画が含まれていた。地元紙には「模擬天守閣も築造」と強調されている⁷³⁾。したがってこの時期までに模擬天守閣の計画を市側は認識していたし、それを許容していたことがわかる。

年が明けても模擬天守閣の設計は、天守跡にあった鐘楼台を取り込んで八間×九間、高さ土台から75尺、五層楼、四方に庇を設けて作成中であった⁷⁴⁾。この時点でも模擬天守閣の設計図が完成していなかったことから、開会までに間に合うのか憂慮された⁷⁵⁾。

天守台での模擬天守閣の建設について、市会で正式に議題になったのは、1936年1月19日の市会協議会だった⁷⁶⁾。1月13日付で協賛会長である商工会議所会頭から「鶴山公園内土地使用願」が市に提出された。そこでは「一層ノ景況ヲ添ヘ本事業ノ助成ヲ図ル目的ヲ以テ鶴山公園内天主閣跡地ニ舊天主閣ヲ模シタル五階建郷土館ヲ建設」し、旧藩主の遺品などを展示することが示されている。市会協議会の議題は「鐘楼に関する件」とあったが、この申し出の内容は、その場所にある鐘楼と屋舎を適当な場所に移転してもらい、その跡地に「天主閣」を建てるために、その土地を無償で貸与して欲しいということだった。

市会協議会では鐘楼の移転費用の負担は誰がするのか、鐘楼を廃止してはどうか、模擬天守閣は仮設なのか、模擬天守閣の建設によって協賛会から市への寄付金に影響はあるのかなど、様々な観点から意見が交わられた。

また協賛会の役員でもあった議員からは、一時的施設であるが、財源さえあれば「天主閣」を建設したいという希望も開陳されている。また協賛会は当初、演芸館を計画していたが、それを郷土館として「天主閣」をつくる方が良いとして計画を変更したことを説明している。この議員は小池寅治郎である。津山商工会議所の副会頭で、協賛会の副会長もつとめた。小池は市会で協賛会の意向を示すなど、市と協賛会のパイプ役になっていた。

鶴山公園内の土地の管理権は市長権限であり、必ずしも市会に諮る必要はなかった。市長は市会を尊重する意味で市会協議会の協議にはしたが、市会の議題とはしなかった。市長は最後に、協賛会の「天主閣」建設は博覧会を成功させるための施設であることから、土地を貸与することを表明し、鐘楼の移転などについては一任を取り付けて議論を収束させた。こうして天守跡での模擬天守閣の建設が公式に承認されることになった。

2月4日の協賛会理事会で、この模擬天守閣について、以下のような方針を最終的に決定した。すなわち「天守閣は舊鶴山城の天守閣を再建するものに非ずして、博覧会の為の臨時建設なれば美観第一のものとするも、あくまで歴史ある鶴山城としての威厳を保ち得るものたること」、「規模は九間×八間五層建たること」などである⁷⁷⁾。

こうしてようやく設計が固まり、総工費一万円強として建設の入札を行うことになった⁷⁸⁾。あわせて鐘楼台を城址東端の太鼓櫓に移転することが報じられた。工事契約は大阪装飾合名社と締結された。1936年2月8日付の契約書では、一週間以内に工事に着手し、3月23日までに建築を完成させることとある。工事期間は一ヶ月半であ

った。延べ床面積 272 坪 5 合の「津山城天守閣」と、6 坪の楼門、延べ 31 間の土堀の図面が添付されていた。高さは最高点で 75 尺であった。二日後の地元紙には「津山新天守閣建築設計図」（図 6）として立面図が掲載された⁷⁹⁾。ここで初めて一般の人々の目に模擬天守閣のイメージが伝えられた。

模擬天守閣の地鎮祭兼起工式は 2 月 15 日に天守跡で執行された⁸⁰⁾。地元紙で博覧会場の配置図が掲載されたのは 3 月 2 日であった⁸¹⁾。配置図は縮尺千二百分の一で、図面中央に位置する天守跡には、「天主郷土館」と記されていた。

この頃は全体的に工事が進捗し、「鶴山城址は挙げて近代建築のオンパレードを現出し早くも遠近から見物人が殺到し前景気旺ん」とであると報じられた⁸²⁾。その後も連日のように地元紙で博覧会の準備状況や紹介の記事が掲載された。掲載された「津山産業博の全景」と題した写真では、城山の上部にかすかに模擬天守閣の木造の骨組みが写り、記事には「老松櫻花の中に聳立する昔ながらの天守閣」として郷土館が紹介されている⁸³⁾。

2) 仮設模擬天守閣の完成と公開

博覧会では産業本館や国防館など 14 の展示館のほか、演芸館など入場有料の 3 つの施設、城址本丸には、協賛会施設としてこの模擬天守閣が建てられた。公式案内書では「天主郷土館」として表記されている。廃城以来の木造五層の勇姿であった。

この模擬天守閣は協賛会の最大事業であった。開会式当日の地元紙では、「尤も大きい呼物となつてゐる協賛會經營の再興天守閣」として取り上げられ、「金色燦然たる二間餘のチャチも屋上高く兩方にはねあがり夜は照明燈でくつきり浮出されありし日の豪華を偲ばせるに至り」と紹介された⁸⁴⁾。

この「郷土館」である仮設の模擬天守閣は、一、二階に旧藩主松平家や旧家老安藤家などが所有する甲冑などの宝物が陳列され、三階はジオラマ場、四階を展望所兼記念品販売所として使用され、最上階の五階は展望台になっていた。

模擬天守閣内の観覧は有料で、大人 10 銭、小学生 5 銭であった。4 月 15 日からは夜 10 時まで観覧ができた。なお博覧会の入場料は大人 30 銭、子供 15 銭であった。

この模擬天守閣は津山に新たな眺望景観を生み出し、また開会式当日の夜から、照明によりライトアップされた。闇夜に、遠方からも容易に望むことができ、文字通りの不夜城を現出していると報じられている⁸⁵⁾。電光により浮き立った姿は、「十餘里の遠きに輝く美観を呈して」、博覧会最大の呼び物であった⁸⁶⁾。主催者である津山市ではなく協賛会が建設したこの模擬天守閣が最も関心を集めた。

図 6 模擬天守閣立面図

図 7 天守復元立面図

期間中の模擬天守閣の入場者数は計 7 万 6 千人強であった。博覧会の入場者の約 4 割が模擬天守閣に入場した。天守閣の収支をみると、入場料収入は約 6 千円を越え、当初予算より約 6 百円多い結果となった⁸⁷⁾。その意味では盛況であった。協賛会の収支も良好だった。そのため 8 月に協賛会は市の博覧会経費に対し 8 千 5 百円の寄付を申し出て、9 月の市参事会で寄付の採納が議決されている⁸⁸⁾。

3) 仮設模擬天守閣の外観

津山城にかつてあった五層の天守は取り壊されたが、残る史料から復元を検討した藤岡通夫の研究によれば、一階は 11 間×10 間であった⁸⁹⁾。それに比べれば広さ、高さともに小規模の模擬天守閣になった。また天守にはなかった破風を、この仮設模擬天守閣では設けているなど、比較的華美な装飾意匠になっている。藤岡は「博覧会に模擬天守が造られてゐるが、舊天守とは規模も形式も全く異なるもの」と指摘している。

その後の津山城天守の研究でも復元図が作成されている（図 7）。その成果と比べても、この模擬天守閣の装飾性が高いことがわかる。

地元紙では一人の文筆家による博覧会の観覧を記事にしている。その中で模擬天守閣についても触れられている⁹⁰⁾。この天守閣が出現したことは、「そがれていた美人の鼻をありし日そのまゝに復せしたうへ更に艶々した文金高島田に結びあげ、それに紅紫とりどりの訪問着を纏はせた時かのやうな美の極地」と評価している。開場後、雨天が続いたが、それでも屋上にある鯨は金色に燦然と光を放っていた。それは「一匁十二円五十銭といふ高い純金箔をブリキの鯨鱗にメッキしてあるから」と、構造や外観についても瓦以外は「何処からどう見ても實に堂々たる」と指摘している。独特な筆致ではあるが、外観の美的装飾性を表現している。

模擬天守閣は仮設のため簡易な建物であり、また復元を志向したものではなかった。協賛会は仮設であるから「美観第一」という方針を打ち出し、木造五層という点は共通であったが、破風を設けて表情が豊かな外観になっていた。

(4) 博覧会後の経過

注目を浴びた模擬天守閣は、会期終了後、6 月 1 日に限り、無料で一般に公開されることになった⁹¹⁾。

6 月 11 日の市会協議会では、鶴山公園で模擬天守閣の建つ土地の使用について議論された⁹²⁾。「天主閣」の所有を主張する二人から、引き継いで土地の無償貸与の申し出があったことに対する協議であった。市長は、公園の管理権は市長にあることから独断専行することもできるが、公園については「市民ガ可成関心ヲ持ツテ居ル」ことから協議したいと説明した。市長は、「天主閣」が博覧会に美観を添えたことは大変なものであると評価した上で、この「天主閣」を市が買い取ることを要望する意見もあるが、市が経営することは、補強工作或維持費等に相当の経費が必要になるので断っていると説明した。また鶴山公園は市の誇りであり、国宝的存在で一木一石といえども昔のまま保存したいと市長の見解を示している。議論は百出したが、最終的には市長が対応を善処することで一任することになった。

協賛会と工事請負の大阪装飾合名社との契約では、建築物使用終了後、合名社が 40 日以内に建物を取り壊し、諸材料等を搬出し、跡

片付けをすることになっていた。それが完了しない時は協賛会が任意に処分することができるとされていた。6月15日がその期限だったため協賛会は、保証金七百円と天守閣の自由処分を請負会社に文書で通達した。しかし請負者も負債をかかえ、債権者との関係から態度が定まらないので、解決は遅延するだろうと、「宙に迷ふ天守閣」と題した記事が掲載された⁹³⁾。

その三ヶ月後の9月29日の市会協議会で「天主閣」の買い取りが協議された⁹⁴⁾。先の市会協議会以降、所有権の権利関係が整理され、協賛会が処分できるようになった。そして市へ買い上げてもらいたい旨の申し出があったため協議案件となった。市長は買い取り価格や維持の問題からさらに研究が必要と慎重姿勢であった。協賛会役員の議員からは、建築も「相当健固」であるから五百円程度の修繕を加えれば三、四年位は大丈夫である、市において買い取る意志があれば早く解決すると、その判断を迫っている。しかし、他にあまり議論は膨らまず、市長は協議会を打ち切った。

さらに翌年1月16日の市会協議会で博覧会剰余金と「天主閣」に関する案件が協議された⁹⁵⁾。天主閣については、「現仮天守閣」の所有権者は、訴訟などを経て複数の債権者から買い取っていた。助役の説明によると、その所有者は自ら取り壊しても良いが、そうすると「市民総怨嗟ノ的」になるから、永久的なものができるまで市が買い取って経営してもらいたいという申し出が商工会議所を通じてあった。希望額は「壱千円」だった。この市会協議会では、わざわざ「仮天主閣」という言い方をして仮施設であることが明示されている。市長も「仮天主閣」と言っている上、本格的な模擬天守閣の建設についての意見があると発言している。「仮」が強調されることは、維持費などは一定の期間だけ必要であることを意味した。しかし特に議論をすることなく協議は終わった。

その後、商工会議所が模擬天守閣を管理することになった。津山市はその維持費として一千円を寄付している。

1938年2月18日の市会協議会で再び模擬天守閣について協議された⁹⁶⁾。現在、非常に破損しているが、商工会議所にはその経費がないので、市が「仮天主閣」を引き受けてくれないか、それができないならば取り壊すしかない、あるいは千二、三百円をかければ相当の修理ができて数年間は維持できるので市で修理してくれないか、という申し出だった。市当局は修理費の捻出は困難であると説明している。議員からは、取り壊すことになってもやむを得ないという意見が出た一方、二名の議員からは、「津山市民」が「天主閣ノ保存」を希望しているという意見も出た。多くの議員から意見が出されたが、この協議会でも決着しなかった。

そしてついに3月16日付で、商工会議所から「鶴山城天守閣」ほか附属する楼門や土堀を含めて市への寄付願が提出された。さらに25日付で、これらが風雨のため壁の脱落や破損があり、相当の修理を必要とするが、それは市の負担で修理してもらいたい旨の追願もあった。市ではその採納について3月29日の市会に議案を提出した⁹⁷⁾。あわせて、「仮天守閣修繕費」として1,450円を含めて計上した昭和12年度歳入歳出追加予算案も提出した。

さらに「鶴山城天守閣」の寄付受納要領も定めた。そこでは、無条件で寄付を受けることとし、寄付受納後は次のように取り扱うこととしている。①天守閣は輪郭を存置することを主眼として市に於いて適当に修理を施す、②天守閣は展望を原則とし一般の入場を許

す、ただし入場者整理のため一人五銭程度の入場料を徴する、③入場許可は四・五月の二ヶ月間とする、④天守閣は他に貸与しないことを原則とするが、適用な催物等のため貸与する時は条例に準じて相当の使用料を徴するなどである。この公文書では「天守閣」が名称として使用されている。

市会では、寄付の採納については全く意見もなく、異議なしとして議決された。追加予算に計上された修繕費については、質疑があった。その答弁をまとめると、この修繕は外観が中心である、特別な天災がない限り二、三年は耐える、もし今後多額の修繕費を必要とする時は処分する、という市当局の考えであった。審議の結果、原案通りに議決された。模擬天守閣の寄付にかかる案件はいずれも原案通り議決された。こうしてようやく所有と管理の責任が明確になった。

これに関連して、この機会に津山を紹介する目的から、郷土館として利用経営してもらいたいとの要望が各方面から起っていると報じられている⁹⁸⁾。この仮設の模擬天守閣を常設の施設として活用する世論が大きかった。

商工会議所は、市に寄付した模擬天守閣を利用して、さっそく同年に展覧会を企画している⁹⁹⁾。4月10日から5月5日まで「支那事变と報国展覧会」を開催した。この開催までに模擬天守閣の修理が進められ、「明粧」になった¹⁰⁰⁾。最上階には戦死を遂げた兵士の写真と祭壇を設け、招魂祭も執行している。

その後も毎年のように模擬天守閣の内部が利用できる4〜5月に展覧会などが開催された。この時期は、桜の開花期であり、鶴山公園への観桜客との相乗効果が期待されることは、博覧会が証明していた。

（５）地域社会での受容性

産業博覧会ではあったが、模擬天守閣は旧藩主や旧家老などが所有する宝物などを展示した郷土館だった。津山に維新时期であった、かつての天守を考証した復元ではなかったが、同じ五層の木造建築だった。ただし施設の建築様式や展示物は城址という歴史的経緯の文脈の沿うものだった。博覧会の入場料とは別の有料施設であったが、博覧会入場者の4割が模擬天守閣にも入っていた。

博覧会の開催時期には、各地の模擬天守閣の建設に触発されて、津山でもその建設が望まれていた。模擬天守閣の建設中から、その姿を目の当たりにするにつれ、市民の世論としてその希望が少しずつ変わっていった。

建設中には、博覧会の開催を契機に、「多年市民が要望してゐた天守閣の再建は永久的のものではないにしてもいよいよ一萬三千圓で實現する」ことになったと地元紙に掲載された¹⁰¹⁾。

会期中には、「永久的造営論起る」と題した記事で、「最近全市民の輿論としてこれが保存か或は本格的建築の議が高まり何等かの方法によって具體化さんとしてゐる」と報じられている¹⁰²⁾。

会期末には、「鶴山城址の天主閣は各方面より非常な人気を呼び早くもこれが存置運動が起るに至つたが現在の建物では恒久性がないのでこれを本格的の天主閣として存続せしめるため再興運動が擡頭」していると報じられた¹⁰³⁾。総工費二十万円を投じて鉄筋コンクリート造とする案もあるという。このように仮設でつくられた模擬天守閣を、そのまま保存するか、あるいは常設の施設として建て替

えるかという、大きく二つの意見があった。鉄筋コンクリート造は明らかに大阪の模擬天守閣を意識していたことがわかる。

いずれにしても常設の模擬天守閣の希望が、より現実なものへと市民の世論が醸成していった。

しかし本格的な常設施設としての模擬天守閣の建設には至らなかった。一方で、仮設の模擬天守閣を取り壊すという判断を誰もができなかった。市民の世論がそうさせなかった。

このように取り壊しを逃れたこの仮設の模擬天守閣は、「張りぼて天守閣」の愛称で長く市民に親しまれという¹⁰⁴⁾。そこに精神的な求心性が宿った。なお1945年、空襲の標的になるとして、建物疎開の一環で市内の公会堂などとともに取り壊された。

5. まとめ

甲府、津山とも、鉄道の開通を契機とした共進会、博覧会の施設として仮設の模擬天守閣が建設された。いずれも近世城郭の城址で開催され、模擬天守閣は天守台に立地した。主催者ではない民間事業による施設であり、有料施設だった。会場内では最も高所にあり、また夜間照明により多くの視線を集めた。近代化のイベントというハレの舞台における集客装置であり、近代の祝祭性を帯びた都市施設だった。

一方、甲府と津山とでは建設の時期が違った。本研究で対象とした模擬天守閣の建設を時系列で整理した表2からわかるように、甲府は最初期であり、津山は最後期である。上記のような共通する性格を有していたが、建設時の背景から位置づけは若干異なった。

甲府の場合、まだ城址本丸に模擬天守閣を建設するという経験がない時期だった。仮設の模擬天守閣を保存する、あるいはそれに替わる本格的な建設などへと、世論が大きく動くことはなかった。近世に、天守がなかったこと、幕府直轄地だったことも一因だろう。それよりも地域の人々が希望していた城址の開放が実現されてから間がなく、市街から視線を集めて、城址公園を主張するような存在に価値があった。

津山の場合は各地に建設された模擬天守閣の影響があった。前稿で明らかにしたように、近世城郭の城址に建設された模擬天守閣では、地域の人々の身体性を帯びた求心性が働き、文化的共有財としての象徴性があった。津山でも同様であった。そのため仮設として建設されたにもかかわらず、また維持管理も充分ではなかったにも

かわらず、取り壊されなかった。仮設が実質的に常設化した存在として市民に親しまれた。

図版出典等

図1:「甲府市全図」(筆者所蔵)、図2:山梨時報、明治37年1月1日附録、図3:甲州文庫(山梨県立博物館所蔵)、図4:「津山市街地図」(筆者所蔵)、図5:『津山市主催姫津線全通記念産業振興大博覧会並ニ協賛會誌』津山市産業振興大博覧会、1939.1、図6:山陽新報、昭和11年2月10日、図7:石井正明:美作津山城天守の復元、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、pp43-44、1998.9、写真1、3:『写真集甲府物語』甲府市、1990.11、写真2:『甲府市史』史料編第六巻近代、甲府市役所、1989.3

参考文献

- 野中勝利:戦国期城郭の城址に建設された模擬天守閣の建設経緯と意義-戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その1-、日本建築学会計画系論文集No.650、pp837-842、2010.4
- 野中勝利:近世城郭の城址に建設された模擬天守閣の建設経緯と意義-戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その2-、日本建築学会計画系論文集No.652、pp1471-1479、2010.6
- 鈴木博之:はじめに-「復元思想の社会史」とは何を意味するのか、復元思想の社会史、建築資料研究社、pp6-9、2006.6
- 公文類聚、第十四編・明治二十三年・巻之二十三・兵制門(国立公文書館所蔵)
- 明治三十年山梨通常縣會議事筆記、第十八號、山梨縣會
- 明治三十六年十一月十六日開會 全年全月二十二日閉會 山梨臨時縣會議事速記録 完、山梨縣會
- 山梨時報、明治37年1月1日附録(山梨県立博物館・甲州文庫)
- 明治三十八年十一月二十五日開會 全年十二月二十四日閉會 山梨通常縣會議事速記録 完、山梨縣會
- 山梨日日新聞、明治36年11月28日
- 明治三十六年十一月廿八日開 全年十二月廿七日閉 山梨通常縣會議事速記録、山梨縣會
- 山梨日日新聞、明治37年9月15日
- 山梨日日新聞、明治37年3月29日
- 山梨日日新聞、明治37年7月14日
- 山梨日日新聞、明治37年7月30日
- 山梨日日新聞、明治37年2月27日
- 山梨日日新聞、明治38年10月28日
- 山梨日日新聞、明治38年11月15日
- 明治三十八年十一月二十五日開會 全年十二月二十四日閉會 山梨通常縣會議事速記録 完、山梨縣會
- 山梨県議会议務局編:山梨県議会史、第二巻、山梨県議会、p222、1973.2
- 山梨日日新聞、明治39年6月1日
- 山梨中央銀行行史編纂室編:創業百年史、山梨中央銀行、p238、1981.3
- 山梨日日新聞、明治39年5月20日
- 山梨日日新聞、明治36年6月13日
- 鳥羽正雄:城と私、鳥羽正雄博士古稀記念論文集編集委員会編:日本城郭史論叢、雄山閣出版、pp349-366、1969.12
- 山梨日日新聞、明治36年2月28日
- 湯本豪一:図説明治事物起源事典、柏書房、pp138-139、1996.11
- 山梨日日新聞、明治36年5月13日、14日
- 山梨日日新聞、明治39年9月13日
- 山梨日日新聞、明治39年9月29日
- 山梨時報、明治39年9月29日
- 山梨日日新聞、明治39年10月2日
- 山梨県立博物館・甲州文庫
- 峡中日報、明治39年10月2日
- 峡中日報、明治39年10月7日
- 山梨日日新聞、明治39年10月9日
- 山梨時報、明治39年9月29日
- 峡中日報、明治39年10月2日
- 山梨日日新聞、明治39年9月16日

表2 模擬天守閣の建設年

年	戦国期 城郭	近世城郭		
		常 設		仮設
1906				甲府
1910	岐阜			
1927		大阪(市会決議)		
1928				
1929	洲本			
1930		大阪(着工)		
1931	羽衣石	大阪(竣工)		
1932			郡上八幡 (着工)	伊賀上野 (着工)
1933			郡上八幡 (竣工)	
1934				伊賀上野 (第一期竣工)
1935				伊賀上野 (第二期竣工)
1936				津山

- 39) 東京朝日新聞、明治39年10月7日
40) 都新聞、明治39年10月25日
41) 山梨時報、明治39年11月12日
42) 山梨時報(明治39年11月12日)と山梨日日新聞(明治39年11月13日)
43) 山梨日日新聞、明治39年11月9日
44) 山梨日日新聞、明治39年11月28日、12月1日など
45) 澁谷俊：甲府城物語、琢美幼稚園出版部、p34、1955.9
46) 都新聞、明治39年10月24日
47) 石井正明：美作津山城天守の復元、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、pp43-44、1998.9
48) 山陽新報、明治12年2月27日
49) 鶴山城址保存発起書、鶴山城址風致保存一件書(明治24年)、矢吹家資料・弓斎文書165(津山郷土博物館所蔵)
50) 卅四年度町會(津山市議會事務局蔵)
51) 明治三十二年一月 津山町會議事録
52) 津山市教育會編：津山史蹟、津山市教育會、p7、1936.4
53) 昭和四年津山市勢要覽、津山市役所、pp79-80、1929.12
54) 昭和十年津山市事務報告書、津山町事務報告抜粋綴り所収(津山郷土博物館所蔵)
55) 博覽會促進挙行嘆願書、津山二業組合、昭和10年1月25日(津山郷土博物館所蔵)
56) 昭和十年六月二十一日協議會會議録、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
57) 昭和十年七月十一日津山市會協議會々議録、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
58) 昭和十年市會會議録、津山市役所、昭和十年市會決議書綴、津山市役所
59) 昭和十年十二月九日津山市會協議會々議録、津山市會、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
60) 津山市主催姫津線全通記念産業振興大博覽會並ニ協賛会誌、津山市産業振興大博覽會、p44、1939.1
61) 山陽新報、昭和10年11月10日
62) 伊賀文化産業城落成記念全國博覽會誌、三重縣上野町、p60、1938.5
63) 昭和十年十二月九日津山市會協議會々議録、津山市會、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
64) 山陽新報、昭和11年3月14日
65) 山陽新報、昭和11年3月31日
66) 昭和十年津山市事務報告書、津山町事務報告抜粋綴り所収(津山郷土博物館所蔵)
67) 山陽新報、昭和11年1月13日
68) 前掲：津山市主催姫津線全通記念産業振興大博覽會並ニ協賛誌、p257
69) 山陽新報、昭和11年5月12日
70) 昭和十一年市會會議録、津山市役所
71) 山陽新報、昭和10年10月9日
72) 姫津線全通記念産業振興大博覽會協賛会誌、津山市産業振興大博覽會、p28、1939.1
73) 山陽新報、昭和10年11月10日
74) 山陽新報、昭和11年1月12日
75) 山陽新報、昭和11年1月17日
76) 昭和十一年一月十九日津山市會協議會々議録、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
77) 前掲：姫津線全通記念産業振興大博覽會協賛会誌、pp28-29
78) 山陽新報、昭和11年2月8日
79) 山陽新報、昭和11年2月10日
80) 山陽新報、昭和11年2月17日
81) 山陽新報、昭和11年3月2日
82) 山陽新報、昭和11年3月7日
83) 山陽新報、昭和11年3月10日
84) 山陽新報、昭和11年3月26日
85) 山陽新報、昭和11年3月28日
86) 前掲：津山市主催姫津線全通記念産業振興大博覽會並ニ協賛会誌、p82
87) 前掲：姫津線全通記念産業振興大博覽會協賛会誌、pp36-41
88) 昭和十一年市参事會會議録、津山市参事會
89) 藤岡通夫：美作津山城天守復原考、村田治郎編：建築史論叢、高桐書院、pp41-55、1947.10
90) 山陽新報、昭和11年4月23日
91) 山陽新報、昭和11年5月6日付夕刊(5月5日発行)
92) 昭和十一年六月十一日市會協議會會議録、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
93) 山陽新報、昭和11年6月18日夕刊(6月17日発行)
94) 昭和十一年九月二十九日市會協議會會議録、津山市會、昭和八年一月以降市會協議會記録、津山市會
95) 昭和拾貳年壹月拾六日市會協議會々議録、市會協議會、昭和十二年以降市會協議會會議録、津山市役所
96) 昭和十三年二月十八日津山市會協議會記録、昭和十二年以降市會協議會會議録、津山市役所
97) 昭和十三年三月二十九日津山市會會議録、津山市會、昭和十三年市會會議録、津山市役所
98) 合同新聞、昭和13年3月17日
99) 合同新聞、昭和13年3月24日
100) 合同新聞、昭和13年4月10日
101) 山陽新報、昭和11年2月18日
102) 山陽新報、昭和11年4月13日
103) 山陽新報、昭和11年5月3日
104) 津山市史編さん委員会編：津山市史、第七卷、津山市役所、p195、1985.3

(2012年10月10日原稿受理、2013年4月4日採用決定)